

【11】 螺髻梵志のその他の特性

[0] 螺髻梵志に付与されているその他の特性を紹介する。

[1] 螺髻梵志は他の沙門をよく供養している。

[1-1] 三迦葉についてはすでに述べた。

[1-2] その他の原始聖典資料の代表的な例は螺髻梵志ケーニヤであり、これはすでにしばしば記した。その他〈37〉は「給孤独の兒である僧伽羅又は結髪を頂く故に、祇林中に詣り多く食を設け僧を供養した」としている。

[1-3] 後期聖典資料の〈13〉は、「激しい苦行者の螺髻行者 (jaṭīlao uggatāpano) であった私は、仏と僧衆を飲食物をもって饗応した (annapānena tappeti)」とする。

[1-4] ケーニヤも出家修行者であったという前提で推測すると、螺髻梵志は出家者で仙人のような苦行も行っていないながら、他の宗教の修行者に供養できるという環境にもあったように思われる。家を出て出家的な生活をしているが、しかし仏教などの出家者のように、俗生活から完全に離脱しているということはなかったのかもしれない。夫婦で出家することも可能であったわけであり、ケーニヤのように子供や親戚、あるいは友人・知人から財政的・物質的補助が期待できるという形態の「出家」であったことになる。

‘jaṭīla’ という言葉が用いられていないので、今までの資料に入れていなかったが、*Suttanipāta* の ‘Pārāyanavagga’ vs.976~ (pp.190~) に登場するバラモンのバーヴァリ (Bāvāri) は「真言に通じ (mantapāragū)」「無所有を求め (ākiññaṇaṃ patthayāna)」ており、「落ち穂を拾い、果実を食べて (uñchena phalena)」、アーシュラマ (assama) に住していたとされるから、おそらく螺髻梵志であったと思われる。彼はコーサラの都から南インドのゴダーヴァリー河の岸辺に移住してきたのであるが、その河の近くに豊かな村 (gama vipula) があって、そこから得た収益で (tato jātena āyena) 大きな供犠 (mahāyañña) を行った。その直後に一人のバラモンがやってきて彼に 500 金 (satāni pañca) を乞うたが、あいにく使い果たしたところでなかった、とされている。このように Bāvāri が螺髻梵志であったとすれば、近くの村から得られる収益が期待できる環境にあったことになる。

[2] 螺髻梵志の到達点も阿羅漢と呼ばれている。

[2-1] 三迦葉に関してはすでに述べた。

[2-2] 原始仏教聖典資料の〈5〉〈12〉〈13〉のように、ニガンタの徒など螺髻梵志にかぎらず、多くの宗教において完成された者を「阿羅漢」と呼んでいたことが推測される。仏教でも用いられることは言うまでもない。しかし後期の原始仏教聖典では螺髻梵志を ‘arahant’ と呼ぶ例は見いだされない。

[2-3] ‘arahant’ は動詞の ‘arahati’ から来た現在分詞であって、そもそもの意味は「価値がある」という意を持つ。したがって ‘arahant’ (サンスクリットでは arhat) は一般的には「尊敬されるべき人」「供養される価値のある者」という意味をもつ。しかし Macdonell の *A Practical Sanskrit Dictionary* では、‘arhat’ に ‘m. worthy person,

Arhat (*with Buddhist and Jains*)’ と解説しているから、ごく一般的な ‘worthy person’ という意味では用いられても、最高の境地に到達した者の呼称としては、「阿羅漢」という用語はバラモン教では用いられなかったのかも知れない。摩訶迦葉は釈尊の弟子として出家するときに、世の阿羅漢の例にならって剃髪し、袈裟衣を着たとされている⁽¹⁾。阿羅漢は剃髪と袈裟衣に象徴されるとするなら少なくとも、螺髻梵志とは異なる。螺髻梵志としてのウルヴェーラ・カッサバが自ら到達した境地とするのはそれが仏教文献であったからであろうか⁽²⁾。

(1) SN.016-011-003 (vol. II p.219)、『雑阿含』1144 (大正02 p.303上)、『別訳雑阿含』119 (大正2 p.418上)

(2) V. S. Agrawala ; *India as known to Pāṇini* (p.387) では ‘Arhat’ について ‘Pāṇini refers to a class of ascetics called yāyāvāra (III.2.176)’ としている。

[3] 螺髻梵志が住するアーシュラマにはしばしば龍が住んでいたとされる。

[3-1] 三迦葉についてはすでに触れた。

[3-2] 原始聖典資料〈27〉〈28〉〈33〉にはそれが言及される。

[3-3] 後期聖典資料では〈22〉にそれが言及される。

[3-4] しかしながら龍は原始聖典によく登場し、精密に調査して分析したわけではないが、螺髻梵志の住処に龍がいるということは、螺髻梵志に備わった特性ではないと思われる。

[4] 螺髻梵志は欲を肯定していたともされる。

[4-1] 三迦葉に関連する記事についてはすでに紹介した。

[4-2] 原始聖典資料〈2〉には、現在は樂で未来に苦報があるものとして、「欲において過なし (na 'tthi kāmesu doso)」という見解をもって欲に陥落する (kamesu pātabyataṃ āpajjati) 沙門・バラモンの説を紹介し、そのなかで「彼らは髻髪の女遊行者とともに楽しむ (te kho molibaddhāhi paribbājikāhi paricārenti)。これら女遊行者は若く柔軟で、髪ふさふさとして腕の感触は楽しい (sukho imissā paribbājikāya taruṇāya mudukāya lomasāya bāhāya samphasso) と欲に陥落す」としている。

欲に陥落するのは沙門・バラモンであって、しかもここに登場するのは ‘jaṭā’ ではなく ‘molibaddhā’ という言葉が使われているので、あるいは本論文が主題とする ‘jaṭila’ ではないかもしれない。しかし paribbājikā というのであるからある種の修行者であって、可能性がないわけではない。もしこれが螺髻梵志の女修行者であるとする、螺髻梵志のなかには男女で ‘paricāreti’ する者があったのかも知れない。もしこのように解釈できるならば、【1】の [16] で疑問を呈しておいた三迦葉の偈も意味が通じる。しかし彼の弟子はすべて「比丘」になったわけで、そのなかに「比丘尼」が含まれていたとは考えられないから、それでも疑問が残る。

[4-3] すでに述べたように螺髻梵志は出家者であったと考えられる。しかしながら【7】の [5-5] で述べたように、夫婦や家族で生活することは禁じられていなかった。もちろんこの場合は性行為を離れることが原則であったであろうが、後期聖典資料〈43〉のケースでは、はじめ銘々が草庵を作って (attano attano paṇṇasālaṃ pavisitvā)、沙門の法を行じ

ていた (samañadhammaṃ karontā) 夫婦が、後に帝釈天の勧めによって自分たちの世話をさせるために息子をこしらえた、とされている。これは妻が月経のときに夫が臍をなでることによってなされたことになっているが、彼らの間に子供が産まれることがさほど不自然ではなかったという証拠となるであろう。しかし仏教的な出家の概念からは、比丘が比丘尼の臍をなでるといふ行為そのものも許されない。ここでは、清らかな生活をしている間については、沙門の法を行じていた (samañadhammaṃ karontā) としていることも、彼らの普段の生活が必ずしも沙門の法のようなものではなかったということを示す。

また資料〈39〉は「夫婦」のところで紹介した「一角仙人 (Isisīṅga)」の話である。ここでは菩薩は1匹の牝鹿 (migā) との間に子供を作った。後にこの一角仙人も女性に誑かされて男女の交わりを行った。男女の交わりを仏教のように厳密に禁止する「法律」のようなものがあれば、それが「女」というもので、それが「交接 (methunasamsagga)」であるということを知らないで交接するということはありえないであろう。したがって螺髻梵志たちには厳格な不淫戒のようなものはなかったものと推測される。

三迦葉の例に見られるように、彼らはすでに出家者でありながら、仏教でも出家して「梵行」を行じることを誓っている。もしここで初めて「梵行」を行じることが誓われるとすれば、彼らは出家者でありながら必ずしも「性行為」は禁じられていなかったということになる。

[4-4] しかし螺髻梵志たちが梵行を修していたとするものもある。後期聖典の〈6〉はその例である。

[5] 螺髻梵志は業の思想をもっていたともされる。

[5-1] 資料〈25〉の『パーリ律』には次のように定められている。外道が仏教で出家を希望する場合は4ヶ月の別住を与えるべきであるが、火教徒、螺髻梵志、釈迦族に生まれたものならばその必要はない、と。

『四分律』や『五分律』『十誦律』『僧祇律』にはこの定めはないが、後期聖典資料〈47〉の『根本有部律』には見いだされる。原始仏教聖典資料ではないが、『善見律毘婆沙』(大正24 p.789下)にも言及されていることは先に紹介した。

[5-2] 具体的に螺髻梵志を描写する記述の中に、はっきりと彼らが業の思想を持っていたとするものはないが、この当時のインド社会には六師外道のような特殊な一派を除いて、幅広く業の考え方は行き渡っていたであろう。したがって彼らが業の思想を持っていた、ないしはそれを否定しなかったということは十分考えうるであろう。

[6] 彼らは学問を持っていたとされる。

[6-1] これは当然のことであるから、特別に調査しなかった。目に触れたものであるが、後期聖典資料〈1〉は「舍利弗は前世において、スルチ (Suruci) という螺髻 (jaṭila) の苦行者 (tāpasa) であり、2万5千人の弟子があつて全てバラモンで、相 (lakkhaṇa) ・古伝説 (itihāsa) ・語彙 (sanighaṇḍu) や儀軌 (sakeṭubhe) 、詩句 (padaka) や文法 (veyyākaraṇa) ・妙法 (saddhamma) において究竟に達しており (pāramiṅgata) 、吉凶占 (uppāda) や占相 (nimitta) や観相 (lakkhaṇa) を熟知していた」とする。

[7] 女性の螺髻行者もいたのかもしれない。

[7-1] 先に [4-2] で紹介した MN.045 「得法小経」に「螺髻を結う女行者 (molibaddhā paribbājikā)」が登場する⁽¹⁾。

また夫婦や家族で出家して、螺髻になった場合もあるとすると、必然的に女性の螺髻行者がいたことになる。

しかし三迦葉の弟子たち 1000 人は全て男性であったのであろう。彼らが釈尊の教えによって具足戒を得たとき、比丘尼になった者があったという記述はないからである。これは最初の比丘尼誕生のエピソードを考えても納得できる。

- (1) ただしここには螺髻を表わす ‘jaṭila’ という言葉が使われていず、螺髻と訳したのは ‘moli’ という語である。しかし ‘paribbājikā’ というのであるからある種の修行者であって、可能性がないわけではない。